2007 年度秋学期教育方法学

最終レポート

チーム番号：Ｆ１

学籍番号：0521-0623　教育学部教育学科　二回生　斎木まり子

レポートのレベル申告（A）

このレポートが（A）レベルであると判断した理由：教科書と講義中に使用した文献と配布資料以外で自分で探した２冊以上の文献を参考、あるいは引用し、文中と最後のページに文献情報を示しているため。

公開同意書

後輩への公開について（a）

web 上の公開について（a）

『目次』

１章：チームで構想した学校

２章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高める
　　ための具体的な学習指導方法

３章：学習指導法の評価と学習者の査定

４章：　この講義の感想や希望
　　難解だった一般用語・専門用語
　　時期受講生へのアドバイス

参考・引用文献

第一章　　チームで構想した学校

１．「F1 のチームの学校を構想するに当たって」

『子どもの現状』

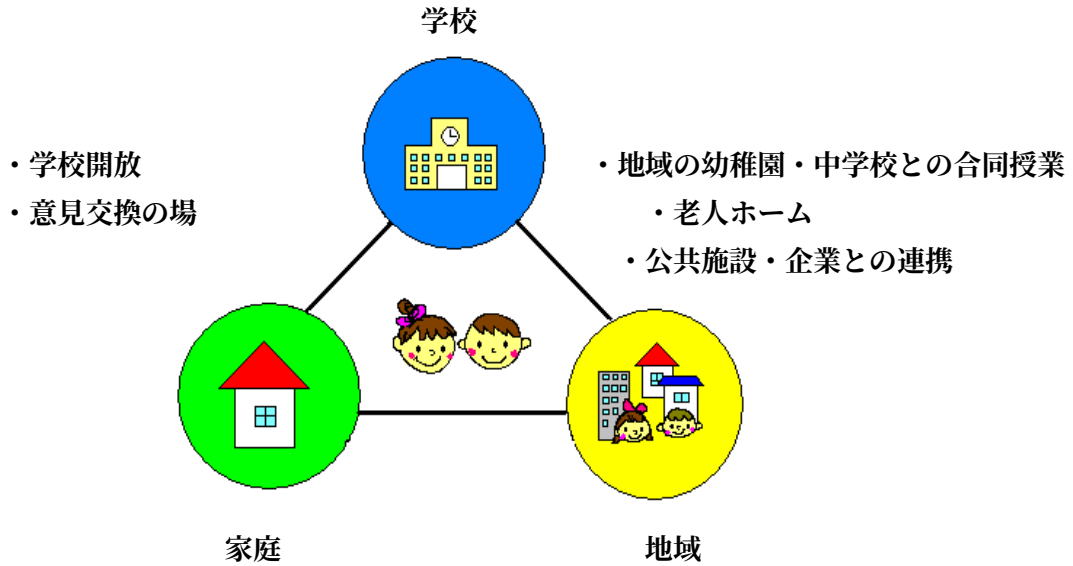
　現在では、社会の都市化や核家族化、少子高齢化、高度情報化などの社会の大きな変化によって、子どもたちの生きる環境も大きく変化している。また、本来は子どもたちの手本となるべき大人社会にも様々な問題があり、将来に対して子どもたちが夢や希望、意欲などを持ちにくい状況でもある。

　このことが、子どもたちの成長にも様々な影響を及ぼしている。いじめや不登校、コミュニケーション能力の低下、校内暴力、学習意欲の低下など、現在の教育に関わる課題は、そうした社会の変化と切り離せられない状況にある。

　これらの問題は学校教育だけで解決できるものではない。そのため、学校が、家庭や地域の理解と協力を求め、これからの社会のあり方や、教育のあり方を一緒に考え、子どもたちを育てていく必要がある。

２．『若葉小学校の特色』

　若葉小学校では、これらの事をふまえ、家庭や地域の人々と連携を深め、家庭や地域とともに児童生徒を育てていくという視点に立ち、『開かれた学校づくり』を目指している。



　若葉小学校での取り組みの柱として、次の３つが挙げられる。

【開かれた学校づくりの３つの取り組み】

①地域との交流　⇒　地域と小学校との連携

②異年齢との合同授業　⇒　小学校と幼稚園、小学校と中学校の合同授業

③３６５日授業参観　⇒　授業フリー参観

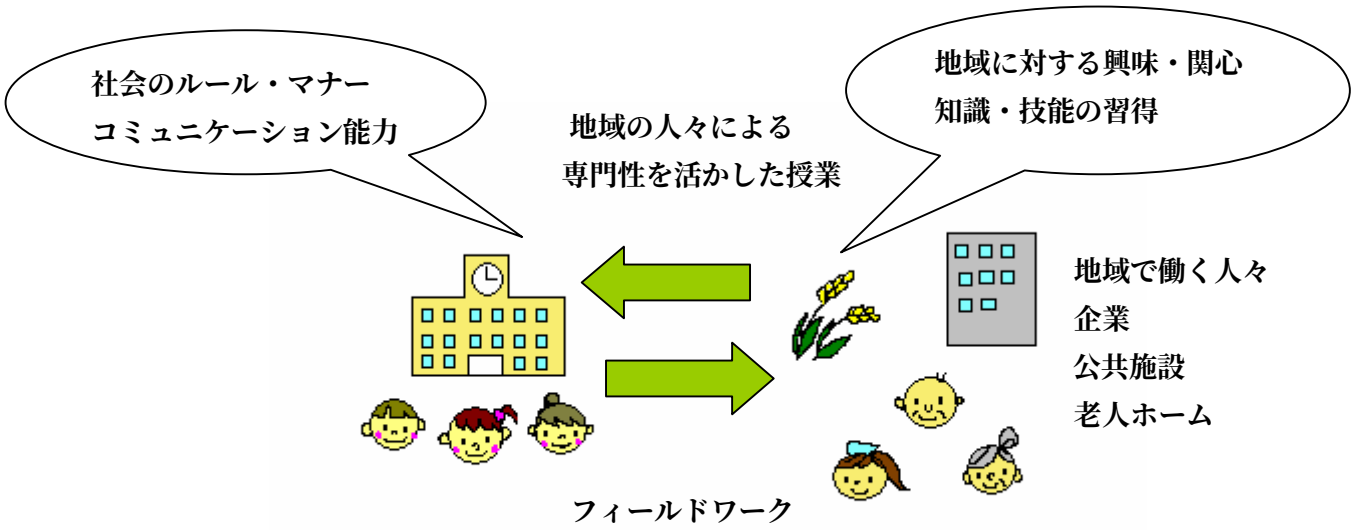
以下は、この三つの取り組みについて詳しく説明したいと思う。

①地域との交流

子どもたちの体験的な学習の場を広げるためには、学校だけを教育の場と考えるのではなく、教育の場を広く社会に求め、地域の公共施設や企業などとの連携を図り、教育活動を展開していくことが望まれる。そこで、若葉小学校では、地域の人々を学校に招き、授業に参加してもらい、それぞれが持っている専門性といったものを活かした授業を行ってもらったり、子ども達が老人ホームや様々な施設を訪問したり、地域に出て学習を行ったりするなど、地域と学校が連携して子どもを育てるといった取り組みを行っている。

この取り組みでは、地域の人々の仕事や、自分の住んでいる地域に興味・関心をもたせることや、様々な年齢の人々との出会いを通して知識や技能、社会のルールやマナー、コミュニケーション能力など、様々なことを子どもたちに身に付けさせることができる。

また、これらの計画は教師が考え行うのではなく、どのようなことを学ぶのかなどを、子どもたちが中心になって計画し、行うことで、自主的に学ぼうとする気持ちや学習意欲を高めることもできる。



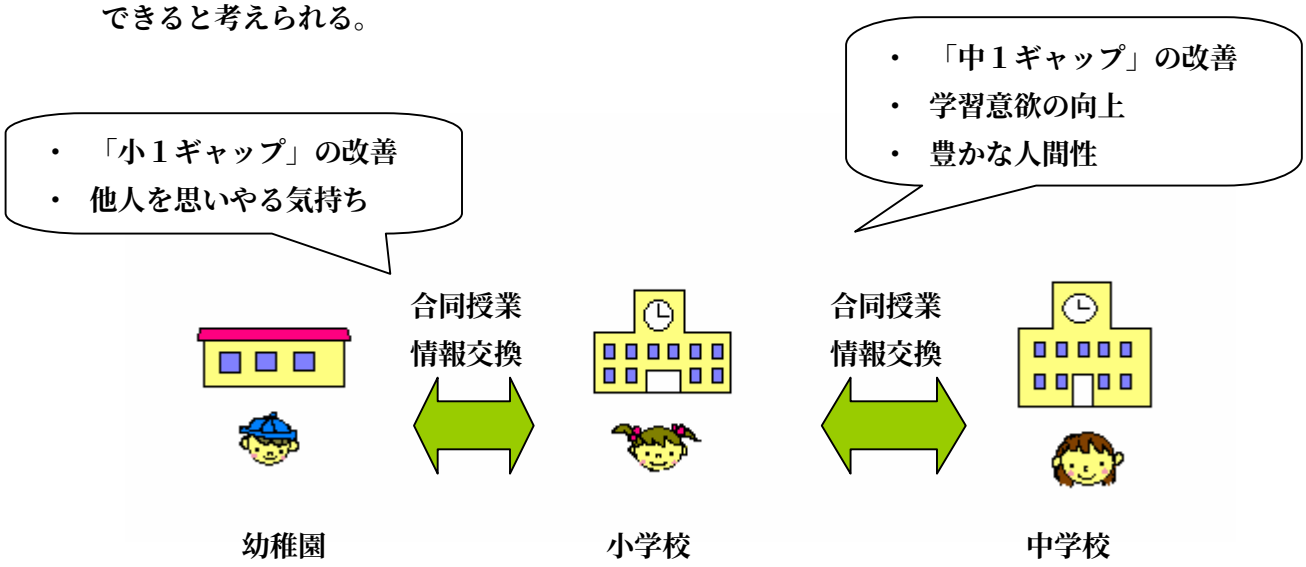
②異年齢との合同授業

この取り組みは、若葉小学校と近隣の幼稚園、中学校とが連携し、合同授業を行う機会を設けるというものである。現在では、従来のように異年齢間はもとより同じ年齢同士でも集団で遊ぶ姿はあまり見られず、子どもたちは人間関係づくりが下手になってきているという問題がある。そのため、異年齢との合同授業を通して異年齢の子どもたちが力を合わせて授業を進めていくことは、他と協調し、他を思いやる心や、一緒に感動する心、豊かな人間性を育むことにつながると考えられる。

実際に、寝屋川市立第十中学校と、三井・明徳・宇谷小学校では、異年齢による合同授業行うことが、豊かな人間性を育むことにつながるとし、2003 年から小中連携の取り組みを

行っている。これらの学校では、特に「理科」に重点を置き、小中一貫教育の指導を実践している。実際に理科の合同授業を受けた子ども達の感想には、「中学生は、最初は怖そうだったけど優しく教えてくれた」「小学生が楽しそうに実験していてよかった」といったことを書いたものが多く、自分達で解決の方法を見つけていくことの楽しさを知ったり、他人を思いやる気持ちを学んだりする機会となっているということが伺える。また、第十中学校の中井校長は、異年齢間の連携について、「経験によって子どもたちに共生の意識が芽生え、一人ひとりに自尊感情や自己存在感が育まれれば、いじめや不登校などの問題行動も減ってくるのではないか」※１と述べている。

他にも、小学校・幼稚園、小学校･中学校間の合同授業を行うことで、それぞれの接続をスムーズにし、幼稚園から小学校に入学した際に起こりやすい、子どもたちのストレス、学習面のつまずき、学習意欲の減退などの、いわゆる「小１ギャップ」や、同様に、小学校から中学校へ入学する際に起こりやすい「中１ギャップ」などの問題を改善することもできると考えられる。



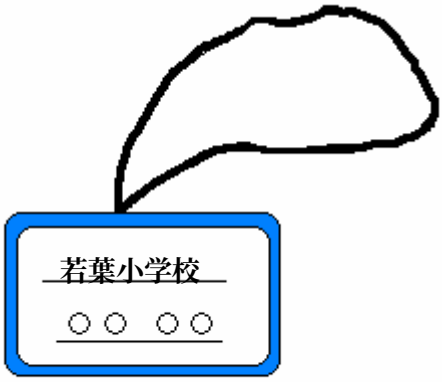
② ３６５日授業参観

この取り組みは、保護者や地域の人々に、授業参観や運動会などの特別な行事の日だけではなく、普段の学校の様子や子どもたちの本来の様子を見てもらえるようにと考えたものである。また、この取り組みを行うことで、仕事や家庭の都合で、参加したくても授業参観や行事などの決められた日に参加できないという保護者や地域の人々でも、学校の様子を見ることができる。

また、学校運営についても、学校を公開することで得られる家庭や地域の意見等を把握しながら絶えず見直し､改善の努力をしていくことができる。

しかし、３６５日授業参観という取り組みを行うためには、不審者の進入を防ぎ子どもの安全を守るという対策が必要である。そこで、若葉小学校では、安全対策として、

保護者対しては、あらかじめ通行証明書を発行しておき、参観の際にはそれを学校の入り口の警備員に見せれば学校内に入ることができるというシステムを設けている。
また、地域の人々が学校を参観する場合は、事前に学校に連絡をしてもらっている。



第二章　　多様な学習者に対する授業

１．『多様な学習者の定義』

①私が考える「多様な学習者」とは‥

学習者である子ども達にはそれぞれ性格、価値観、発達性、学力、学習スタイルなどの様々な違いがあるということ。

②「学習者が多様になった背景」

学習者が多様になった原因は、家庭や保護者の影響や、社会の変化など、子どもが育ってきた環境にある。また、「ゆとり教育」というものも、学習者が多様になった原因のひとつである。「ゆとり教育」とは、これまでの偏差値に基づく一元的な学力序列で、できる子とできない子に分けるのではなく、多様な能力を持つ子どもが、それぞれ自己実現できる社会造りを目指そうとしたものである。

杉本（2004）※２は、「ゆとり教育」では、その一方で、学習内容が大幅に削減され、従来であれば保障されていた学習内容が保障されなくなった。そして、塾などの学校外教育に通わせることのできない家庭は、公立学校で展開される削除されたカリキュラムで教育を受けるしかないということを指摘している。このことから、家庭環境が子どもの学力に少なからず影響を与えていることがわかる。つまり、子どもを取り巻く環境全てが、子ども達の学力や学習スタイル、価値観、発達性、性格などに何らかの影響を与え、学習者である子ども達を多様にしているのである。

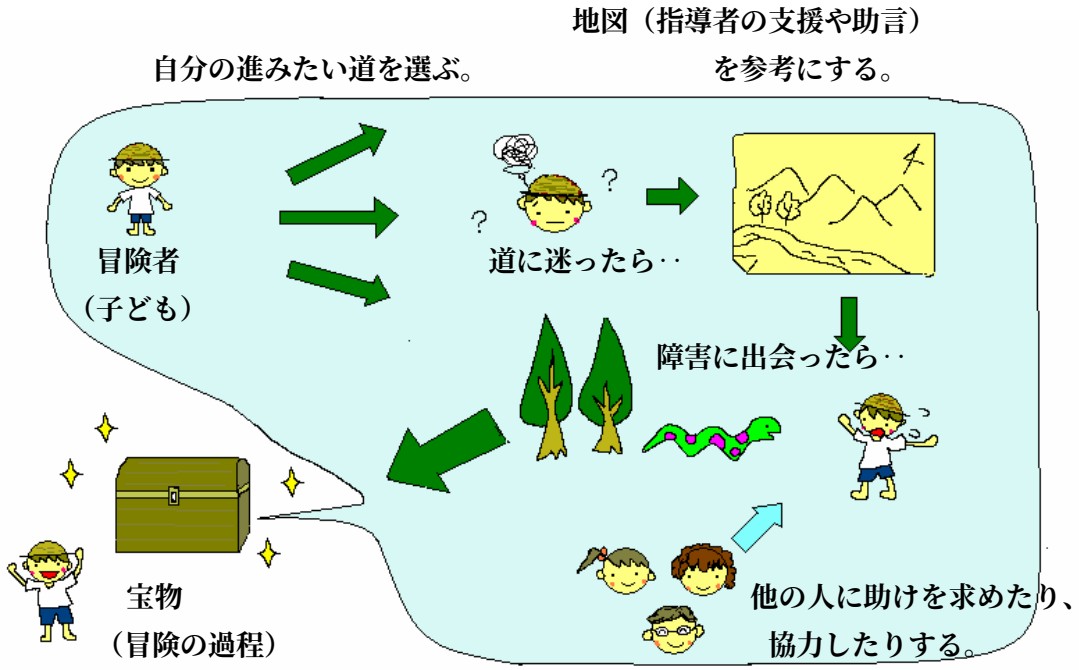
２．「多様な学習者が主体的な学び」のメタファー

若葉小学校が考える「多様な学習者が主体的に学ぶ」とは、『宝探し』のようなものである。

子ども達の学習は、広く見通しの持てるもの、子ども達自身が学習の目標を持って取り組めるような、魅力のあるものでなくてはならない。そこで、私達の班では、子ども達一人ひとりの学習の目標を「宝物」と考え、子どもの主体的な学びを、その「宝物」に辿り着くまでの冒険と考えた。

冒険者（子ども達）は自分の進みたい道を好きなように選択していくこともできるし、時には、地図（指導者の助言や支援）を参考にして宝物を探していく。道に迷った時や障

害物に出合った場合には、他の人に助けを求めたり、自ら考えたりすることで解決へと導いていく。冒険者にとって「宝探し」とは、宝物を見つけることだけに意義があるのではなく、冒険者を成長させていく宝物に辿り着くまでの過程も財産となるのである。



３．日本の子どもの読解力の実態と読解力の定義

読解力とは、文部科学省の『読解力向上プログラム』※3 において、『自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力』と定義されている。

平成 15 年 7 月に OECD が実施した PISA 調査の結果において、わが国の子どもたちの学力は、「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」、「問題解決能力」の得点については、いずれも一位の国とは統計上の差がなかったが、その一方で、「読解力」の得点については、OECD 平均程度まで低下している状況にあるなど、大きな課題が示された。また、この調査により、わが国の子どもは、「テキストの解釈」「熟考・評価」とりわけ「自由記述（論述）」の問題を苦手としていることが明らかとなった。文部科学省の『読解力向上プログラム』では、この結果を PISA 型「読解力」の課題が「読む力」にとどまらず、「書く力」や、「考える力」と関連していることを示唆している。そして、子どもの PISA 型「読解力」を向上させるためには、国語科の指導だけでなく、他の教科や総合的学習の時間、学校の教育活動全体を通じ、「考える力」を中核とし、「読む力」「書く力」を総合的に高めていくことが重要である。また、読書活動を通じて、言語についての知識や経験を深めることで、PISA 型「読解力」を支える基礎力を育成することも必要であると述べている。

４．学校内での子ども達の現状

最近、学校の中では基本となる会話で自分の考えを相手にうまく伝えられない子や、相手の話す内容を理解することができない子など、他人との意思疎通ことが困難な子どもが多く、そのために子ども同士の間で言葉の行き違いによる口論が絶えない。また、子どもの読書離れにより、語彙が少なく、教師のが話している内容が理解できていないことも少なくない。そのため、子ども達には、相手の気持ちを読み取る力、理解する力、つまりは読解力を向上させる必要がある。

また、同じような問題を抱えている近隣の小学校では、この問題の対策として、読書活動から読解力をつけようと、朝の１０分間読書を始めたが、読書を嫌う児童は、机に伏せて読書を行わないか、読むふりをしているだけであり、あまり効果が見られないという。

この原因は、子ども達に本を読む習慣というものが身についていないために、いきなり本を読む時間だけを与えても、どのように本と関わっていいのかわからないためである。まずは、子どもたちに、話を読み・聞きいることの楽しさを伝える事が大切である。子どもが本や物語にふれる機会をつくり、本に親しみを持てるようになった状態になって初めて、子どもたち自身が「本を読む」という活動を行うことができるのである。

５．若葉小学校の取り組み

若葉小学校では、これらの問題を解決するために、読書活動を通して「読解力」をつけるといった取り組みを行っている。

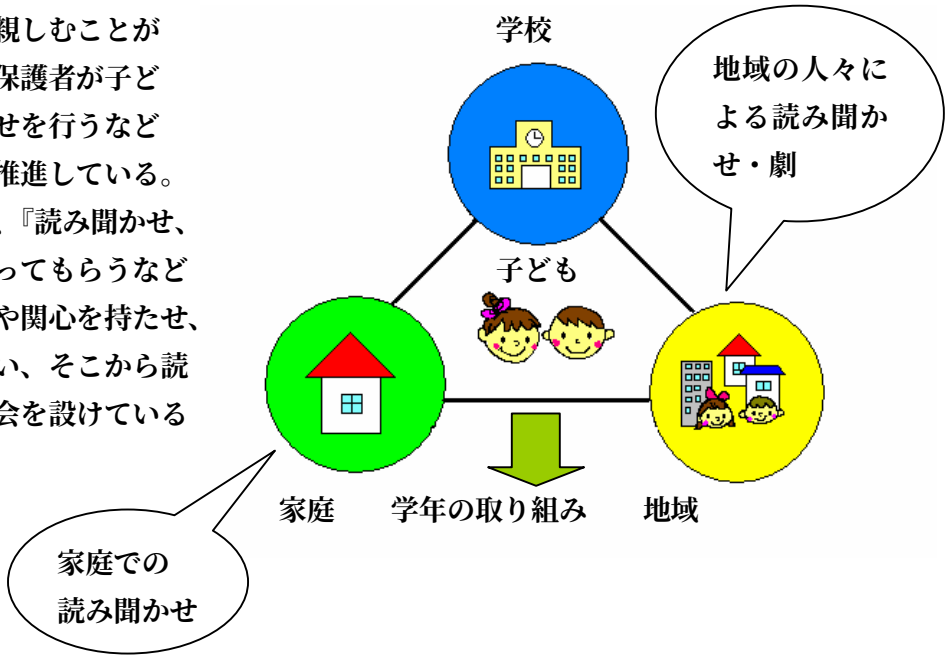
〈学校全体の取り組み〉

子どもの読書週間というものは日常の生活を通して形成されるものであり、家庭の果たす役割は非常に大きく、保護者自身の読書に対する姿勢も子どもの読書活動に大きな影響を与える。

そこで、学校全体の取り組みとしては、子ども達が、身近なところで読書に親しむことができるように、家庭に対して、保護者が子どもと一緒に本を読む、読み聞かせを行うなどの『家庭における読書活動』を推進している。

また、地域の人々に対しては、『読み聞かせ、劇、パネルシアターなど』を行ってもらうなど子ども達に、物語に対する興味や関心を持たせ、子ども達が読書の楽しさを味わい、そこから読書活動を広げていけるような機会を設けている

学校全体の取り組み



〈学年ごとの取り組み〉

第５学年の国語科の授業では、先ほど述べた学校全体の取り組みを活かし、読解力向上のために「ブックトーク」の取り組みを行っている。

★Meaning（学ぶ意味）

ブックトークの取り組みにおける学習の意味とは、一人一人が本に興味・関心を持ち、今後の読書活動に活かしていけるようにすると同時に、読解力を付けるということである。

読解力を向上させるためには、「読む」「書く」「聞く」「話す」の４つの基礎能力をバランス良く伸ばす必要がある。このブックトークの取り組みでは、本を読み、自分なりに紹介する文章をまとめ、自分の意見を発表したり、他人の意見を聞いたりする活動を行うため、「読む」「書く」「聞く」「話す」の４つの基礎能力を伸ばすためには最適な取り組みであると考えられる。

ブックトークの活動を行うことの利点は、一人一人が自分の意見や考え、学習の成果を他人に伝えることができるというところにある。自分の調べ学習だけで終わってしまうことと、自分が学習してきたことを他の人にも伝えられるということでは、学習における意欲や、学習を終えての達成感や充実感といったものは全く違ってくる。また、こういった充実感や達成感といったものが、次の活動へのやる気や意欲を生み出すのである。

★ Action（学習活動）

活動においては、まず、学校全体の取り組みで述べたように、地域の人々による演劇や本の読み聞かせなど、日頃から子ども達に読書と関わる機会を提供する。そして、そこから学年ごとの取り組みへとつなげていく。

五年生の「ブックトーク」の取り組みでは、まず、クラスでどのような本を読むのか『テーマ』を決める。この『テーマ』というものは、本のジャンルや、活動のねらいなどであり、テーマはその時々の子どもの発達性をふまえて決められる。今回のテーマは「低学年の子どもに自分の選んだ本を紹介しよう」である。これは、異年齢間の交流も目的として含まれている。

子ども達は、まず、それぞれがテーマに沿った本を学校の図書室や地域の図書館で探してくる。今回は、「低学年に紹介する本」というテーマであるため、子ども達は、自分の選んできた本が低学年の子ども達にとって、難しくないかどうかなどを考える必要がある。

次に、探してきた本を読み、一年生への発表に向けて、紹介の方法や手順、時間配分などを個別に考えていく。ここでは、自分の選んだ本の内容を理解し（読む力）、紹介できるように文章でまとめる力（書く力）を伸ばすことができる。この取り組みでは、ポ

ートフォリオを用いて、学習の記録（自分の学習の進行状況・よくできたところ・工夫した点・苦労した点・改善点・次回の目標など）を積み上げていく。この際、教師は子ども達の学習活動をよく観察し、一人一人の進行状況を把握しておくことが大切である。そして、その時々に合った支援や的確なアドバイスを行う必要がある。

ある程度、発表の構想が組み立てられてきたら、五年生のクラスで一度、発表を行う。発表の仕方は、低学年の前で発表する際の練習にもなるように、発表者が一人一人前に出て本の紹介をし、他の子どもは机やいすは片付け、床に座って発表を聞く。

クラスでの発表の利点は、他の人の前で発表することで、他の人に指摘や評価をしてもらったり、他人の発表を聞いて見習いたいところなどを発見したりすることで、今まで気がつかなかった改善点に気付くことができるということである。また、発表を通して、自分の意見や思いを相手に伝える力（話す力）と、他人の発表を聞き、他人の意見や発表の内容を理解する力（聞く力）を伸ばすことができる。

クラスでの発表の際には、児童にも評価カードを配り、発表を聞いて「よかった点・参考にしたいと思ったところ・わかりにくかったところ・改善したほうがよい点」などを子ども達が評価し、そのカードは発表者に渡す。

このように、クラスでの発表を通して得た、他の人からの評価や指摘をもとに、もう一度、発表の仕方やまとめ方、考えを深めていく。

発表の準備ができたら、低学年のクラスで発表を行う。低学年のクラスでの発表の後は、低学年のクラスの担任から、発表の感想を聞いたり、アドバイスをしてもらったりする。そして、最後にポートフォリオを用いて、今までの自分の学習を振り返り、今回の学習活動からできるようになったことや、今回できなかったことや、改善していきたいことなどを考え、次回の活動に活かせるようにする。

★Contents（学習内容）

- 情報を収集し、内容を読み取る力。（読む力）
- 内容を要約し、文章にまとめる力。（書く力）
- 他の人に自分の伝えたいことを表現できる力。（話す力）
- 他の人の発表から、他の人の意見や考えを理解することができる力。（聞く力）

→ 読解力

★ Environment（学習環境）

家庭、地域、学年の教室、他学年の教室、図書館、学校の図書室,全校集会

★ Tool（学習用具）

ポートフォリオ、本、インターネット、黒板、チョーク、マジック、画用紙、マグネット、評価カード、原稿用紙

★ Outcome（学習成果）

学習の成果は、子ども達一人一人がポートフォリオを作成し、それを見て、自分が学

習してきた学習を振り返ることで、自分は何ができるようになったのか、また、何が今後の課題なのかを理解することができる。

第三章　学習指導法の評価方法

第二章では、『読解力』をつけるための取り組みや学習方法について述べてきたが、これらが達成されたかどうかを知るためには、しっかりとした評価方法といったものが必要である。しかし、この取り組みの目標である『読解力の向上』とは、目で見えるような成果は表れにくく、算数のテストのように、はっきりと点数で表すことができるようなものでもない。また、『読解力』というものは、すぐに身についたり、成果が現れたりするとは限らない。

このことをふまえ、評価の方法を「教師による評価」と「自己評価」と「担任以外からの評価」の３つに分けた。以下は、この３つの評価について詳しく述べたいと思う。

●教師の評価

今回は、「読解力」を向上させるための「読む」「書く」「聞く」「話す」の４つの基礎能力と、子どもの学習に対する意欲や態度を評価の観点とする。

① 子どもの授業中の活動に対する意欲や態度

この評価では、子ども達が、発表に向かう過程において、順調に活動を進めることができているか、自主的に活動に取り組もうとする態度が見られるかなどを授業中の活動の様子や、子ども達一人一人が作成したポートフォリオを参考に見ていく。

西岡（2003）は、ポートフォリオづくりは、教師が具体的な証拠をもとに子ども達の学習の実態を把握でき、また個々の活動が子どもたちにどのように受け止められているかについてもとらえることができるため、教育課程の効果と問題点を評価するうえでも有効であると述べている。※４

そのためにも、教師は日ごろからしっかりと子どもの活動を観察し、ポートフォリオづくりを子どもと共同して行い、子どもの学習を把握しておく必要があるのである。

② 原稿や発表から

原稿からは、本の内容がしっかりと読み取れており、要訳することができているかをみる。発表においては、発表の内容が相手に伝わりやすいものになっているかをみる。また、発表の際に児童に書かせた評価カードからは、子ども達が、他の人の発表をきちんと聞き、理解し、指摘やアドバイスができているかを確認する。

他学年での発表の場合は、他学年のクラスの教師に評価をしてもらう。このことによって、今までの自分の活動の途中経過を知らない人からの的確な評価やアドバイスをしてもらうことができるのである。

●自己評価

児童による自己評価（活動の進行状況・工夫した点・改善点・次回の目標など）は毎時間行う。ポートフォリオにはその自己評価の記録と、子どもの作品を蓄積していく。

ポートフォリオを用いて自分の活動を振り返ることで、自分の活動を客観的な視点から見ることや、活動においてつまずいた時に、以前の自分から解決策を見つけていくこともできるのである。このように、ポートフォリオを用いて、自己評価や自分の学習を蓄積していくことで、その時々の学習だけでなく、その後の活動にも活かしていくことができるのである。

●担任以外からの評価

今回の活動では、子ども達同士でも評価をさせている。

発表における評価とは、問題解決の能力や、文章表現の能力の評価に比べ、個人の物の考え方や感じ方によって左右される部分が大きく、評価は難しい。そのため、評価は自己評価や教師による評価ばかりでなく、発表を聞いた子ども全員に意見やアドバイスを返してもらうことが重要である。そして、そのたくさんの目から見た評価を参考にして、活動を行っていくことで、子ども達は、より自分を成長させることができるのである。

第四章

１．講義の感想・希望

この講義は、チームで学習を進めていかなければならないという点が、大変でした。またその反面、自分を成長させるとても良い機会になりました。

チームでの学習が始まったばかりの頃は、みんな授業に対して受身的であり、意見を出し合うこともなかなか難しいといった状況で、自分達の班での役割も、よく理解できておらず、先生に言われた自分の係りのことだけをやっているといった状態でした。

最初に行った発表の準備では、介護等体験や、履修している授業の関係で、みんなの予定が合わず、みんなには集まる時間がないと言われ、模造紙は一人で仕上げ、発表の内容はそれぞれが考えてきて本番を迎えるといった感じで、班で協力して活動しているとは言い難いものでした。

しかし、発表を通して、自分達の発表を聞く人がいるということへのプレッシャーや、他の班の発表を見て、自分達もがんばろうという気持ちが出てきたこと、また、他の班の人に指摘やアドバイスをしてもらったことなどから、中間発表を終えた後からは、班でのまとまりが出てきました。また、ショートレポートを作成していくことで、みんなの考える学校というものがある程度、はっきりとしてきて、冬休みの前までには班の中で、みんなが自分の意見をしっかりと発言することができるようになりました。班の中でのショートレポートの回し読みや、評価をすることでは、自分の今まで気がつかなか

ったことや、他の人の考え方を知ったり、自分の考えたことをより深めたりすることができ、とても良い経験になりました。

また、班での活動が終わった後、そこで活動を終わらせてしまわず、さらに自分自身のレポートを作成することで、今まで行ってきた活動全体を把握することができ、今までの考えをひとつのまとまりとして見直すことができました。

方法学の講義を終えてみて、介護等体験などで授業を休まなければならない日があったり、提出課題が多かったりとなかなか大変だったけれど、その分多くのことを学ぶことができたし、自分を成長させることができました。

２．難解だった一般用語・専門用語

「個性」・「我」‥よく聞く言葉であるにも関わらず、考えてみるとはっきりとした意味の違いを理解できていなかったことがわかった。

「読解力」‥PISA 調査で取り上げられている読解力と、自分が考えていた読解力というものに少し違いがあったため、理解しにくかった。

3．次期受講生へのアドバイス

自分の考えを持つことも大切ですが、それを押し通すだけでなく、時には、他の人の意見や考えにも耳を傾け、参考にしていくことで、新たな発見もあるだろうし、そのことが自分自身の考えを深める良い機会になることもあります。教育方法学の授業では、このことをふまえ、たくさんの人の意見や話を聞き、自分自身を成長させていってください!!

【参考文献・URL】

・志水宏吉(2005)「学力を育てる」岩波書房

・杉本均、山内乾史、原清治　編（2004）『教育の比較社会学』学文社　※２

・西岡加名恵（2003）『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法―新たな評価基準の創出に向けて』　図書文化　※４

・鈴木敏恵「ポートフォリオについて」http://www02.so-net.ne, jp/^s-toshie/portf, html

・京都府教育委員会「京都府子どもの読書活動推進計画」(2004)
http://www.kyoto-be.ne.jp/gakkyou/dokusyo/keikaku.htm#kihonn

【引用文献・URL】　・小・中連携による学力向上の取り組み（１）　（2005）※１

http://benesse.jp/berd/center/open/syo/view21/2005/sp/02jirei‐23.html

文部科学省「読解力向上プログラム」※３

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.